福井市立郷土自然科学博物館研究報告
第30号：103－106　（1983）

自然科学－つづき－

冨田惣七

昨年の研究報告第29号に〝自然科学〟という題で，私のひそかな危惧のことを書いてから早や一年になりました。一年はあっという間でしたが，それにしてもこの一年間の変わりようは，ほんとに加速度というものをまざまざと見せてくれました。

× × ×

一年前私は，獣医学者笠井千石先生が『欲望を満たすための科学の〝便利さ〟だけを考えて，その〝害〟に思い至らなかった人間の愚かさが，そろそろ〝とがめ〟を受けることになるだろう』と言っておられる事を書きました。

一年後の今わたくしは，K・ローレンツが『人間の退化的発達，つまり逆行的進化が遂に引き返えせない地点にまできてしまった』と宣言しているのに出くわしました。

そして―1980 年に生れた赤ん坊が，極く平均的に孫をもつ年令に達する頃，すでに，われわれが今吸収しているこの大気中の酸素が欠乏しはじめる。―と言われています。

× × ×

すがすがしい朝の冷気，それはもう昔のおはなし。まして，それを胸いっぱいに吸いこんで，などと言ううれしさなど夢のはなし。

そうなったとき，足羽山は何色になっているだろうか。

（ねぢばなはどんな顔をしているだろうか）

酸素が欠乏しはじめた場面を具体的にいろいろ考えてみると，どんな情景が浮んでくるでしょうか。

× × ×

だがしかし，人間はそう素直には考えないのです。

そしてそれを考える代わりに―いや，そういう説もあるかも知れんが，しかしこういう理由があってそうはならんのだ。もし仮になったとしても，それにはこういう手があるではないか。こんな方法が工夫研究されるだろう―と都合のいい事ばかり考えるのです。そして更に傷を深くしていくのです。それが即ち人間というもののようです。

× × ×

青木淳一という―土だに―の専門の先生は『現代の科学は，なんでもかんでも分析しないと気がすまない学問になりきってしまった。ある特定の生物に反応が出ないからといって，その環境が健全であるとは断定できない。それは特定の物質に関してだけ，汚染の有無を示してくれるにすぎない』と言っておられます。

＊　福井市照手１丁目２－９

植生学の大家宮脇昭先生は，日本列島の照葉樹林の保存と，照葉樹による緑の創造こそ，歴史を滅亡の流れから救いあげる唯一の道だと奮闘しておられますが，その願いは日毎に裏切られていくと言われています。

大気は流れる。ほとんどくまなく汚染されているだろうに，ここではまだこういう反応がない，と利得にくらんだ眼をギラギラさせている。

× × ×

科学的とは，常に〝末端の分析〟を総体の中へ戻して，修正や補充を加えながら全体の状態を確認する，そういう事ではなかったでしょうか。

× × ×

ここでごく普通の市民である或る喫茶店の主人の言葉をはさんでおきたいと思います。

— 空気が汚れりゃ木は枯れる。木が枯れたら雨が降っただけでもだんだん崖がくずれていく。あたりまえの事や。そのことが目の前にあるんじゃ。だけど，こりゃ大変と誰も動き出さん。—

この人は野草を見るのが楽しみでよく足羽山を歩くのですが

— このしばらくの間に山で何ケ所崩れたか，知ってなるか？ — と私にきくのです。

× × ×

自然科学という学問が存在する基底とは何でしょうか。それは何の故に存在すべきなのでしょうか。もちろん山が荒れるのは，木を枯らすという社会現象としての原因があります。

しかし，自然科学という学問のグランドワークは，これに対して，人々はどのように対応すべきなのかを教え，そしてそのためのいろいろな手段のノートを社会へ送ってやる，そういうものではないでしょうか。

× × ×

巷 問 寸 言 集

○ — 本当にもう第一楽章がはじまった。指揮台にたっているのは誰やろかネ — ある俳人

○ — 逆進化とやら，そんな言葉が僕の方でも使われはじめた。人間が進歩と思っていたものは結局みんな逆行性であったんだネ — 大学の工学の先生

○ — 又新しい車を買い換えて，速くて快適，口笛ふいてる。だがそれが歩くことを失っているんだ，とはぜったい考えない。愚だネ — これは住職

○ — 政治屋てな商売や，自分らのふところばっかり，役人も右へならい。校内暴力と騒いでいるかと思ったら，何やら空へ飛ばしたというニュースに，世の中どんどん進んでいるネ，とよろこんでいる。助かりっこないね — 食堂の主人

（みなそのままで私の脚色はありません）

× × ×

宮本輝という作家は，外国へ行ったとき日本のことを考えると『人間がひしめきあう騒然たる廃墟これが一番ぴったりした言葉』と言っています。

— だけどそれは特に日本がひどいというだけで，先進国と呼ばれている国は，何か彼かみんなそんなもんじゃ — 若い歯科の先生

先進国というのは，どういう国のことでしょうか。

一足お先に，奈落の底へまいります，という国のことですかね。

× × ×

K．ローレンツの言うように，現代の文明は，人間が自からを滅亡させるために，という信じられない奇妙な軌道の上を奔走しています。

悲劇は，それを人間が気付かない，いや気付こうとしない，というところにあります。

それはむしろ，人間が書いたあらゆる〝劇〟の中で，これ以上のものはないと謂うすばらしい喜劇かも知れません。

今やその喜劇の幕があきます。

× × ×

先日の新聞で，一秒間に何万という回路を処理するコンピューターのことと，自転車を蹴ったといってその小学生をしめ殺した高校生のことが同じ頁で報道されていました。

もう暴力，覚せい剤，売春は都市の学校では普通の出来ごとになってしまったと謂います。

これらを，先端技術というものと並べてみると，まことに見事な ― 今日の ― 情景となります。笠井千石先生の〝とがめ〟は先づこのようにして現われはじめました。

× × ×

人間の頭脳は，先端技術といわれるものに驚嘆の領域を創りだしましたが，それと同時に，殆んど完全に，生物としての人間機能の〝ゆくすえ〟の展望を見失ってしまいました。

叡智は死にました。

テレビは馬鹿でも目さえあけていれば分ります。漫画も同様。

― 思考するー認識するー判断する ― そういう必要はなくなりました。

― 思慮 ― が人間の中から消えていくのは当りまえのことです。

― 思慮 ― して行為することをしなくなった者が，衝動的に人を殺したり，暴力をふるったりするのは，あたりまえのことです。

× × ×

人間が，自分の行為を裏側から眺めて，それを反省の資とする風潮がまだ残っていたのは，日本では伊藤仁斉が堀川塾を開いた寛文年間のころまでででしょう。

ヨーロッパではもっと以前のガリレオが―振子の等時性ーを発見した頃からあとは，だんだん自己反省，つまり自己の客観把握というものが影をひそめていきました。

それを科学時代への移行といいます。

つまり，近代科学というものは，哲学を同伴しなかったわけです。

つまり，科学とは呼ばれていますが，極めて非科学的なものであったわけです。

どうでしょう。すでに100年以上も前に，フォイエルバハは ― 哲学は自然科学と，自然科学は哲学と結びつかなければならない ― と言っています。

もう100年も前に，哲人によって忠告は発せられているのです。

× × ×

一言でいえば，〝自然をみる眼〟が根本のところで狂ってしまった。自然を軽ろんじ，それを〝絶対のもの〟としてみる心を失ってしまった。そしてそれどころか反対に，人間がすべての事を解明し，すべての物を創造し得るかの如く，身のほど知らずな盲信に熱中しているのです。

そして実に，そのことで今度は自らを消滅させようとしているわけです。

つまり，それが人間というものであったわけです。